令和６年９月１日発行（毎年1.3.6.9月の1日発行）　第170号

一仏両祖の教えを今に伝える

曹洞禅グラフ

SŌTŌZEN GRAPHICS

2024彼岸 秋号
No.170

特集
パレスチナを訪ねて25年。
現代美術家
上條陽子が続ける支援のかたち
［取材執筆］やなぎさわまどか

悲しみの泉

島薗 進

映画を見て涙を流し、心を揺さぶるいい映画だったとの思いとともに映画館を出る。こんな経験をお持ちでないでしょうか。テレビドラマでも、小説でも、絵本でも、あるいはある種の音楽や歌を聞いても涙を流すことはあると思います。その作品のなかに悲しい場面があり心が動く、音楽が心の悲しみを呼び覚ますといった経験です。そういう機会を思い出してみると数えきれないぐらいある。人の心には悲しみの泉があり、くめどもつきないと言えるのではないでしょうか。

芸術作品やエンターテインメントではなくリアルに悲しみの涙がこぼれて止まらないということもあります。大切な家族や親族、親しい友だちや同僚との別れは、そうした機会の代表的なものでしょう。お通夜やお葬式で棺のなかの亡くなった方と対面したとき、お別れのお花入れのときなど、悲しみの泉があふれてしまうように感じることがあります。

あるほどの菊投げ入れよ棺の中

これは夏目漱石が親しかった女流作家の死に際して作った俳句です。私自身、父の死後、お骨を抱いて寺へ帰り、初七日の法要をすませた後、緊張が解けたこともあり、涙が溢れ出た経験があります。

では、悲しみの泉は人生の後半になってだんだんと深さを増していくものなのでしょうか。そうかもしれません。しかし、子どもの悲しみが浅いものだとは言えないのではないか。グリーフケアについて学ぶようになってそう思うようになってきました。自分の幼少年時を振り返っても少しは思い当たるところがありますが、他にもいくつか気づくきっかけがありました。

一つは童謡や童話にはなぜ悲しいことがらが取り上げられているのか、ということがあります。「赤とんぼ」には「十五で姐やは嫁に行き　お里のたよりも絶え果てた」とあり、「十五夜お月さん」には「十五夜お月さん妹は田舎へ貰られてゆきました　十五夜お月さん母さんに　も一度わたしは逢いたいな」とあります。

新美南吉という童話作家は「ごん狐」などでよく知られていますが、子どもの悲しみについて心にしみる物語が多いです。「うた時計」は父と争って家出をしていた三十歳代の周作がしばらくぶりに家に帰り、翌日、家からうた時計を盗むようにもって出てきたという話です。道で周作は十歳そこそこの廉という少年に会い、廉は亡くなった妹がうた時計が好きだったことを思い出し、周作の父からうた時計を借りたことを話します。それとなく話をしているうち父の気持ちを思いやって、周作は少年にうた時計、つまりオルゴール付きの時計を託し、去っていきます。

少年院で収容されている数人の少年たちと読書会をしていますが、「うた時計」を取り上げたところ、彼らはすでに亡くなったり、会ったことがない自分の父のことを話してくれました。家に帰れなかった経験も彼らのよく知るところです。十代後半の少年たちですが、深い悲しみの泉がそこにあることを強く感じた経験でした。

しまぞの すすむ
1948年生まれ。
宗教学者。
東京大学大学院名誉教授。上智大学神学部特任教授。同グリーフケア研究所所長。
専門は日本宗教史。

挿画｜本間希代子　絵描き。岐阜の山村で田舎暮らしをしながら、古楽器奏者の夫 渡辺敏晴と「アトリエ玉手箱」を主宰。2023 年に第 3 回安城市新美南吉絵本大賞を受賞し、絵本『ひとつの火』を出版。

パレスチナを訪ねて25年。

現代美術家 上條陽子が続ける支援のかたち

二〇二三年十月七日の侵攻により、
パレスチナは再び
イスラエルの軍事攻撃に脅かされています。
飢餓や砲弾の痛みに泣く幼い子どもたちや、
崩れた建物を背景に悲痛な叫びで訴える
パレスチナの人々を見るたび、
どうにかならないのだろうかと憤り、
自分にできることは何かと自問することが増えました。
四方を海と壁に囲まれた
〝天井のない監獄〟と呼ばれるパレスチナ自治区ガザ。
非人道的な占領に
「こんなことはおかしい！」と
声を上げ行動を続けているのは、
画家の上條陽子さんです。
自由に紙や絵の具を使って
絵を描いたことがないという
パレスチナの子どもたちに、
一九九九年から絵画指導をしてきました。
現在も日本からできることで
支援を継続している上條さんのアトリエを訪ねて、
パレスチナで見たことや
平和への思いをお聞きしました。

ご自宅兼アトリエには、さまざまな作品が並ぶ。

戦争の影響で聴覚を失っている子どもたちも

パレスチナの友人たちから「絶望ばかりで、もう希望もない」なんていうメールをもらうと、本当にやるせない気持ちになります。みんな大家族で子どもも多いので、食料も燃料も不足している状態では未来を明るく考えることなんて無理なんです。爆撃で自宅や職場、家族の誰かしらを亡くしている人ばかりです。人が宇宙を行き来するような時代に、そんな苦労をしている人たちが同じ地球にいること自体、おかしいじゃないですか。罪のないパレスチナの人たちが何万人も殺されて、その大半は子どもか女性であることに、胸が苦しくなる思いで報道を見ています。

続けなくてはいけないと思った、子どもたちの笑顔

最初にパレスチナに行ったのは一九九九年、JAALA美術家会議による展覧会が開催されたためでした。滞在は四十日間。その間にエルサレム、ラマラ、ガザの三箇所で日本の美術家七名の展覧会をしたんです。自治区とはイスラエルの統治下のこと。道路を隔てたイスラエル側は欧米諸国みたいな暮らしをしているのに、パレスチナはいろいろなものが足りていない印象でした。

最初の画廊で、パレスチナの画家たちがテーブルを広げながら「子どもたちが絵を描きに来る」と言うんです。パレスチナでは学校を午前と午後の二部制にしたため、子どもたちは十分に学べず、また画材道具なども不足しているので、絵を描いたことがないんだ、と。その後も、ガザの難民キャンプや聾(ろう)学校にも絵を教えに行きました。戦争の影響で聴覚を失っている子どもた

芸術が放つメッセージには、時間や場所を超えてもなお届く力がある。

ちも多く、二〇〇名程が通っている学校です。子どもたちはカラフルな絵の具に思い思いの声を上げながら、大騒ぎで楽しんでくれました。

そうした経験から、日本に帰国してパレスチナのために「何かしたい」という気持ちが消えませんでした。最初は難民キャンプの子どもたちに絵の具を贈ろうと思って、自分の展示会場で絵の具を募集したんです。新聞に取り上げられ、ずいぶん集まったのですが、いざ送ろうとしたらイスラエルの侵攻が起こり、ガザに発送できなくなってしまいました。それを知ったレバノンの女医さんから、支援団体を通じて難民キャンプで絵画指導の要請をもらい、二〇〇一年からはレバノンに行くことになりました。生まれて初めて絵を描く子も多く、目を輝かせている様子に心を打たれてしまったんです。継続的な活動にしようと思い、「パレスチナのハートアートプロジェクト(PHAP)」を立ち上げました。子どもたちを日本に招聘したり作品展などを開催したり、シリア内戦が始まる二〇一一年までは毎年、十日間ほどレバノンの難民キャンプに通いました。もちろん毎回渡航費は自己負担です。同行したい人という人も受け入れていました。芸術を学ぶ学生が勉強のために一緒に行ったりすると、子どもたちは一層楽しそうに遊んでましたね。

生まれて初めて絵を描く子も多く、
目を輝かせている様子に心を打たれてしまったんです。

八歳で体験した横浜大空襲と重ねて

難民キャンプでは女性たちが刺繍や手芸品を作り、フェアトレードの支援に出したりしています。以前その様子を作品にした

ことがありました。彼女たちが使うようなハサミをいくつも飾った自分の作品を眺めていたら、そのハサミがまるでB29が飛んでいる様子に見えてきたんです。そこで作品では、針から赤い糸を垂らし、爆弾に見せました。

八歳のときに横浜大空襲があり、不発でしたが保土ヶ谷の家にも四発落ちました。空にたくさんのB29が来て、雨のように大量の焼夷弾が落ちてきた。そこから赤いリボンのようなものがヒラヒラしていた記憶がありました。制作のため、気になったので調べに行ったら、焼夷弾は尾翼として二メートルのリボンが折りたたまれていて、落下しながら中の爆薬がリボンに火がつく仕組みだとわかりました。子どもの頃の記憶は正しかった。私はパレスチナの問題をやっているけど、自分のことでもあったんだ、と気がつきました。無意識の中で繋がっていたんですね。

現在も積極的に企画展などを開催している。

画家同士、つながりをこれからも

シリア内戦のため渡航を断念していましたが、二〇一三年にもう一度、絵画指導の要請がありました。同じ支援団体を通して、特別に四日間だけガザでの滞在が許可されたんです。十一回目のパレスチナでした。そこで一九九九年に出会ったパレスチナの画家のソヘイル・セレイムさんと15年ぶりに再会しました。ソヘイルさんは画廊「エルティカ」を7人のパレスチナ人の画家で経営しており、その中のモハメド・アル・ハワジリさん、ライエッド・イサさん、そしてソレイムさんの3人を二〇一九年に日本へ招聘しました。彼らにビザが下りる確率は2%と言われましたが、実現できました。

実は、またパレスチナの作品展をしたいと考えて「新しい作品を送ってね」と三人にも頼んでいたのですが、今回の侵攻が始まってしまいました。新しい作品を受け取ることもできず、さらに彼らの「エルティカ」も爆撃され、ハワジリは家族親戚をもう十名も亡くしたと言っています。どれほど辛いことでしょう。

やはりこんなことはあってはいけない。自分にできる範囲のことをこれからも続けていこうと思っています。幸い私の元には、パレスチナの子どもたちの作品や「エルティカ」の7人の画家の作品がありますので、たくさんの方に見ていただき、支援に変えていきたい。またパレスチナのことについてお話させてもらえる機会があれば、学生たちや画家たちにも伝えていきたいです。

私はパレスチナの問題をやってるけど、自分のことでもあったんだ、と気がつきました。

上條 陽子（かみじょう・ようこ）
現代美術家。1978年〈玄黄（兆）〉で女性初となる安井賞受賞。1982年、文化庁在外研究員として欧州滞在。1986年には大病のため二度に及ぶ手術を経験し、聴覚障害等が残るも画家としての活動を継続。1999年「東京からの七天使」巡回展にてパレスチナを初訪問。2011年には「パレスチナのハートアートプロジェクト（PHAP）」を立ち上げ、以降レバノンのパレスチナ難民キャンプで子どもたちに絵画指導や展示開催、さらに2019年には3名のパレスチナ人画家を日本に招聘した巡回展を開催するなど、積極的なパレスチナ支援を継続している。

取材執筆｜やなぎさわまどか
ライター、編集、翻訳マネジメント。食と農と社会の課題をテーマに執筆する。株式会社Two Doors代表。

撮影｜羽柴和也

読者プレゼント

今回の特集にご登場頂いた上條陽子さんの画集『上條陽子とガザの画家たち　希望へ…』（主催：佐喜眞美術館）を5名の方にプレゼントいたします。仏教企画（下記「お便り募集」送り先）まで、お名前・郵便番号・ご住所・電話番号・プレゼント名を明記のうえハガキでご応募ください。**2024年11月末必着**

本誌168（春）号のプレゼント、柳田由紀子さんのご著書『宿無し弘文　スティー・ジョブズの禅僧』は、次の方々が当選されました。

北海道／矢部眞紀様　東京都／中江悦子様
静岡県／谷口良和様　京都府／大谷教学様
長崎県／鈴木博子様

お便り募集

身近な人との心温まるふれあいや本誌への感想、仏教についての質問などを600字以内でお寄せください。Eメールでも受け付けております。

送り先
〒252-0116
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
仏教企画編集部

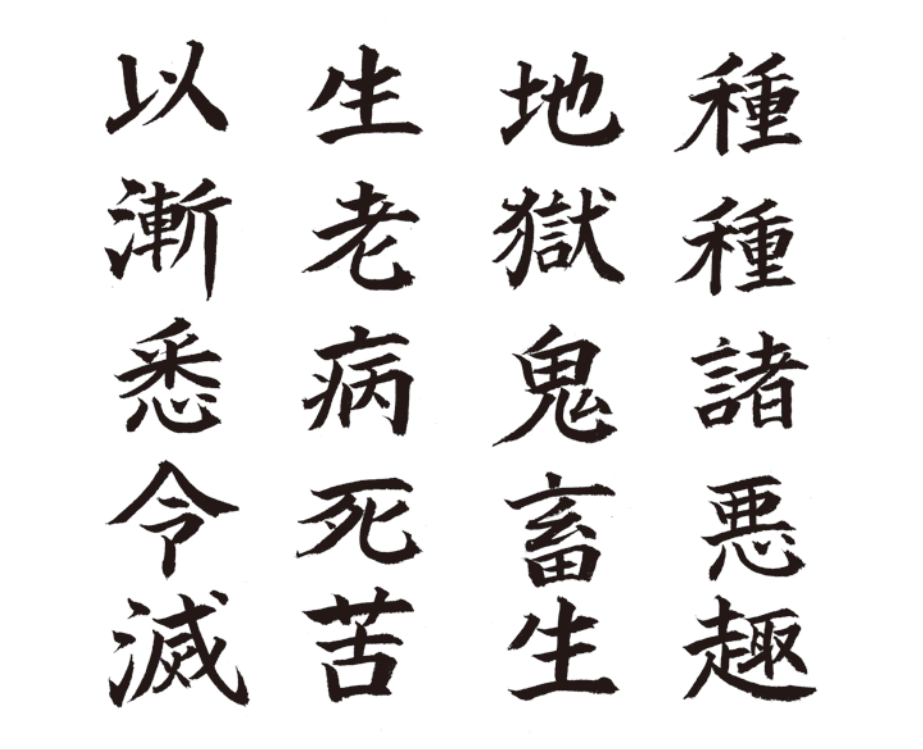
Eメールアドレス
fujiki@water.ocn.ne.jp

読者からのお便り

春号（No.168）に掲載されていた、島薗進先生「いのちの恵の尊さ」の一文、良かったです。野菜をきらうわが家の孫達によませました。理解できたかな？　岩手県　**吉田睦子 様**

『曹洞禅グラフ』をいつも楽しく拝読しております。藤田一照師インタビュー「愉快であれ。」楽しく読ませていただきました。編集の皆様、暑い日が続きますのでお身体大切にお過ごしくださいませ。　千葉県　**星昭子 様**

毎日書道



書家 松山妍流（けんりゅう）

種種諸悪趣（しゅじゅしょあくしゅ）
地獄鬼畜生（じごくきちくしょう）
生老病死苦（しょうろうびょうしくく）
以漸悉令滅（いぜんしつりょうめつ）
『法華経』「普門品」より

あらゆる悪の境遇
地獄・餓鬼・畜生界
生老病死の苦は
（それらを抱く者たちに）
以て、次第に悉く
滅せられるのである

作品募集

ご家族のみなさまのご応募をお待ちしております

お手本を参考にして、作品を半紙（横向、お名前は左側）に書いてご応募ください。（無料）
ご応募の中から優秀な作品を選び、年に1度誌上で発表し、記念品を贈呈します。
住所、氏名、電話番号を明記して作品をどしどしお寄せください。
165号（夏号）～168号（春号）の審査発表は171号（冬号）にて行います。
169（今号）～172号（春号）の審査発表は175号（冬号）にて行います。

送り先 〒252-0116　神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
仏教企画　☎042-703-8641

締　切 2024年11月末日（当日消印有効）

松山妍流先生は、埼玉県所沢市吉祥院住職丸山劫外師のお姉さんで書家（佐藤柯流に師事）です。

『曹洞禅グラフ』

募集俳句選

選・尾崎竹詩

宿院の朝の勤行百千鳥（ごんぎょうももちどり）

千葉県　戸田ユミヲ

宿院は宿坊と同じとのこと。百千鳥は春の季語。作者は永平寺のような山深い宿坊に宿泊し早朝の勤行に参加されたのでしょう。その時間帯は百千鳥の囀（さえず）りも最高潮となる時間帯です。宿泊者の読経の響きとたくさんの鳥の澄んだ囀りがシンクロしてきて桃源郷のような得（え）も言われぬ心地よい勤行となったのではないかと思われます。仏の境地とはこのような雑念を忘れられる境地なのでしょう。俗世間からかけ離れた幸せな時間が想像されました。

夕闇に辛夷（こぶし）の白き道しるべ

東京都　青山千代子

辛夷の花は早春に真っ白い花を樹木いっぱいに咲かせてくれます。本来は山野に自生していたのですが、最近はその荘厳な美しさから街路樹としても多く植えられるようになってきました。この句の辛夷も街路樹として植えられていたのでしょうか。周りが薄暗くなってきた中で辛夷の花の咲く道だけがほの白く暮れ残っているのです。

父の日に脱がせて着せるプレゼント

佐賀県　池内淳子

父の日のプレゼントには毎年頭を悩ませる方も多いのではないでしょうか。喜んでもらえるだろうか、似合うだろうかと気になっているのです。今まで着ていたシャツ（？）を脱いでもらいプレゼントした新しいシャツを着せたい気持ちがよく伝わってきました。

畦道（あぜみち）でゆばりに驚くつくしんぼ

埼玉県　西岡備中

ちょっと下品になるが「ゆばり」とは小便のこと。この句の場合立ち小便になる。どうしても我慢ができなくなって立ち小便をした。放尿後の恍惚感。するとそこは一面の土筆（つくし）の畦道だった。土筆もさぞ驚いたことだろう。

選者詠

夕芒（ゆうすすき）しばらく心が放浪す

尾崎竹詩

作品募集

みなさまのご応募をお待ちしております（お一人3作品まで）

お申し込み方法

作品、住所、氏名、電話番号を明記して下記のいずれかにてお寄せください。

1　はがき、封書で投稿
　送り先・〒252-0116
　相模原市緑区城山4-2-5
　仏教企画
　『曹洞禅グラフ』俳句募集係宛

2　Eメールで投稿
　fujiki@water.ocn.ne.jp

締切　2024年11月末日（当日消印有効）

- ご応募の中から優秀な作品を選び、誌上にて発表する予定です。
- 更に年に1回冬号（新年号）にて年間優秀作品を選出し、記念品を贈呈します。

おざき　たけし●1947年　徳島県阿南市生まれ。2016年　現代俳句協会理事。2019年より神奈川県現代俳句協会会長

安らかな未来に向かう「八正道」的くらしかた

藤井隆英（ふじい・りゅうえい）
豊橋市一月院副住職。横浜市 徳雄山 建功寺勤務。北海道大学水産学部卒業。同大学院中退。整体師。zafu代表。身心堂 主宰。「zafuざふ」「安楽坐禅法」開発者。禅をベースにしたオリジナルの運動療法、動的瞑想法を伝える活動を展開。

9 「正定」～いかに得るか～ 最終回

2年間にわたり繙いてきた「八正道」も今回で最終回です。ありがとうございました。

仏法による安らかな未来に向かう八つの指針「八正道」。今回は八つ目「正定」を参究いたします。

「正定」は、仏法的生き方を修めていくための学びの根源である三学「戒定慧」のうち、「正念」と同様、本質的安寧を得るための実践基盤である「定」にあてはまります。「正念」は、仏法的に正しい捉え方への実践指針、「正定」は、実践が仏法的に正しいかを裏付けするための指針となります。

原始仏教における修行体系の一つに「四如意足」があります。これは「正定」を四つに分類した指針であり、実践が仏法に沿い為されているかを検証し続けるための四つの視点です。

❖欲如意足：意欲を得ていくべく、内側から起こる願いや意志に注意を向ける視点。

❖精進如意足：努力を得ていくべく、私が何を行っているのかに注意を向ける視点。

❖心如意足：想念を得ていくべく、思い浮かぶさまざまな思考に注意を向ける視点。

❖観如意足：形質を得ていくべく、洞察によって調われる意識に注意を向ける視点。

仏法に沿うとは、八正道の第一である「正見」に基づいた智慧と慈悲的見方を基礎として、すべての物事を公平に受容共感し続けることです。その状態とは「善悪」のような相対的な判断や、決められた「正しさ」に沿った判断基準によって築かれるのではありません。仏法に沿った状態を得るべくどのような意志・行い・思考・意識をもてばいいのかを問い続けることが「正定」を進めていくことであり、検証の基盤なのです。

「正定」により検証される「八正道」の実践指針とは、決して誰かの決めた「正しい道」を頑張るのではなく、各徳目における正しさの観点が、仏法に沿った形での「幸福」や「安寧」に連なっているのかについて常に向き合い実践し続けることなのです。それが安らかな未来を築くための大切な指針となるのです。

今回は、胸の膨縮により呼吸を促すことで、元気を育てる「胸識呼吸ワーク」をお伝えします。

足を肩幅程度に広げ、足の裏全体を床に着けた状態にして、腰より下の下半身を安定させます。一旦体を軽く揺らすなどして上半身をできるだけリラックスさせておきます。体勢が調いましたら息を止め、特に腹部と胸部に意識を寄せます。止めていることで変化していく身体状態と、徐々に呼吸をしたい欲求が沸いてくる精神状態を苦楽の判断なく受容していきます。

止めていた呼吸に耐えられなくなってきたら、我慢していた呼吸を解消するよう一気に息を吸い込みます。できるだけ鼻で吸いながら徐々に腹部を凹ませ胸郭を広げ肩を上げていきます。腹部の凹みと胸郭の開きをより意識できるよう、手の平は胸やお腹に当てておいてもよいです。吸いきった状態で息を止め、身体と精神の状態を観察し続けます。

吸いきっていた呼吸に耐えられなくなってきたら一気に吐きます。吐くと同時に全身脱力するよう、腕の力を抜き上半身を前に傾けます。その後起こる呼吸はコントロールせず吸われ吐かれるまま、心地よさに委ねられた脱力感を味わいます。最低三呼吸は自然に任せ、呼吸が調ってきたらゆっくり起き上がります。行うほどに胸の膨縮の柔軟性が高まります。

暮らしに花を

九十五歳の生け花師範

喜瀬和代さん

95歳になる喜瀬和代さん。

九十五歳になる今も、現役の生け花師範として活動する喜瀬和代さん（95）。福徳会で檀家さんとのご縁を大切にされてきました。越谷市のご自宅で、息子の博之さん（68）と共にお話を伺いました。

花の咲く庭

——ずっと生け花のご活動をされてきましたね。

和代さん 腰が弱ってきて、庭の仕事もだんだんできなくなりましたけど、本当にお花だけはずっと好きですね。もう五十年くらいになりますね。免許を持っていて、生け花の師範なので、今もおけいこに来てくださる生徒さんがいらっしゃいます。

——いちばんのやりがいはどんなところでしょうか。

和代さん 教えているというよりも、おしゃべりして、一緒にお茶を頂いたりして。それが楽しみでしているようなものです。長くお茶とお花を教えてくれていた先生がいらしてね。何人か集まってお稽古をしていたのですが、先生が来られなくなってからは私が教えるようになって。その先生も今年の二月に亡くなられましたけどね。一年なんて本当にあっという間。こんなに長生きすると思わなかったですものね。

季節ごとに様々な花が咲く庭。

——息子の博之さんもお庭のお仕事をされていますね。

博之さん 四十数年いた職場を退職して、今は地域に何か貢献したいなと思って、シルバー人材で剪定をやっています。お庭をやっていますから、仏様のお花も買ったことがないんです。一年中、ちゃんと何かが咲いてくれますので。春になれば沈丁花から始まって、梅、桜と咲いて。ツツジ、サツキになって、アジサイが咲いて。

和代さん おけいこに来てくれる友達が仏様にあげるお花がないというので、「みんな切って持っていっていいわよ」って言うと喜んでくれます。

健康の秘訣は？

——九十五歳になるということで、お元気の秘訣はありますか？

和代さん のんきだからじゃないですか。あまりくよくよしないからだと思います。能天気なのかな。

博之さん 母は一度も入院していないです。医者には通っていますけど、血圧の薬と腰の痛み止めをもらうだけ。それから食事はけっこうこだわっていますね。できるだけバランスよく食べるように、葉物から根菜物からとかって考えて。今は息子に作ってもらっていますけど、私があまりにうるさく言うので、気を付けてくれるようになりました。働きに行って、夜の支度までしてくれるので申し訳ないですけど、手を出すなっ

博之さん て言うので、任せっぱなし。私は出来合いのものや、化学調味料がだめなので、昆布や鰹節で出汁から取って、こだわってやっています。味の濃いものは作らないようにしていますね。

むかしのはなし

——昭和四年生まれとのことで、青春時代はずっと戦争時代でした。

和代さん 青春なんてありませんよ。学徒動員で、お勉強なんかしたくてもできなかった。本当に女学校卒業したのが不思議なぐらい。一年生のときはまだ学校に行けましたけど、二年生ぐらいから学徒動員で、それこそ古谷製菓に行ったり、農場試験場に草取りに行ったりとか。よく卒業できたものですよね。でもね、当時の校長先生が、「学校の生徒なんだから、一週間に一日だけは勉強させてください」って将校さんにお願いしてくださって。そのおかげで土曜日だけは学校へ行って勉強することができたんです。英語はもちろん（敵対する国の）外国語ですから、二年生ぐらいからは全然やらなくなりました。大学まで行った人も、私のクラスでは一人だけ。お医者さんのお嬢さんの方が北大に入りました。女学校を四年生で卒業するか、終戦後に二年の補習を受けるか。そんな時代でした。

仏教との「ご縁」

——仏教、曹洞宗とのかかわりはいつごろからでしょうか？

和代さん 私の父は門徒宗（浄土真宗）なんですが、本当に信心深くて。私が小さいときに、お坊さんが月に何回もお参りに来てくださっていたのを覚えています。そのたびに私は父の後ろで手を合わせていました。でも結婚してからは宗教との関わりはあまりありませんでした。主人が亡くなったのが平成六年（一九九四年）で、お墓もなかったですし、千間台にあったご住職のお宅に仏間があって、そこへ初めて伺ってから、春と秋のお彼岸とお盆、毎年3回は通っていました。もう三十年経ちますね。

息子の博之さんと。

大本山永平寺にて、福徳会の皆さんと。

博之さん おやじの葬儀の前までは、うちには仏壇もなくて。私なんかほとんど無宗教ですから。亡くなった父の家系が曹洞宗なので、葬儀屋さんに頼んで近くの曹洞宗のご住職を呼んでいただければと言って。それが初めてです。

和代さん そこから本当に長いご縁ですよね。福徳会といってね。藤木老師と濱村さんが中心になって、お彼岸とお盆のほかに、お食事会や忘年会をしたり、旅行したり。神奈川の総持寺や、浅草寺。本当にいろんなところへ連れていっていただきました。仏教のお話なんかも交えてくださって、写経をしたりとか。この写真の方たちが本当に親しくしてくれました。いまは、みんなどうしてらっしゃるのかな。

——既に生前受戒されていますね。何か特別な思いはありますか。

和代さん 特別、深くは考えなかったですけど。みんなでお戒名を一緒にいただきました。あの時のみんな、どうしてらっしゃるのかな。名前もだんだん忘れていきそうになるので。お元気なのか、亡くなられたのかも分からない。最近は食事会も自然消滅しちゃって。一人、二人とだんだん来なくなって。でも、いい思い出ですね。本当にみんないい人ばかり。

玄関を開けると生け花が迎えてくれる。

取材執筆｜矢田海里（やだかいり）　ライター。著書に『潜匠　遺体引き上げダイバーの見た光景』（柏書房）。

ペット供養を考える

正木晃

写真―金子悟

（まさき・あきら）
宗教学者。1953年、神奈川県生まれ。国際日本文化研究センター客員助教授を経て、早稲田大学オープンカレッジ講師。『現代語訳法華経』『「ほとけ」論』など多数の著書がある。

ペット（愛玩動物）供養が、最近の仏教界で大きな課題になっている。ペットを人間並みに供養するという発想は、日本だけなのであろうか。海外にもあるのだろうか。供養という行為は、供養される対象が、生前はもとより、死後も霊魂として存在しているという前提が必要だ。この点は動物も同じはずだ。では、動物に霊魂はあるのか。

たとえば動物愛護の先進地域とされるヨーロッパはどうだろうか。最初の事例は、西洋が生んだ最大の哲学者であり、後世に絶大な影響をあたえてきたアリストテレス（前三八四～前三二二）である。彼は人間とほとんど同等とまでいえるかどうかは別にして、動物の中にそれなりの知性または知性的なものの萌芽を認めていたようだ。動物に知性や理性にほとんど匹敵するようないろいろな能力や美徳があるとまで考えていたらしい。このような「動物にも霊魂はある」論は、その後もヨーロッパでは長く受け継がれていた。

写真提供・福井県御誕生寺

ところがアリストテレス以来の動物霊魂論を完全に覆してしまった人物がいる。近世ヨーロッパ最大の哲学者・思想家であり、その影響力は他に比類がないデカルト（一五九六～一六五〇）だ。彼に言わせれば、動物は一種の自動機械である。動くのは時計が歯車やゼンマイで出来ているので、正確に時を刻めるのと同じだ。仮に動物に霊魂はあるとしても低劣で、人間の霊魂とは似ても似つかない。そもそもキリスト教では救済の対象は人間だけだから、動物に人間並みの霊魂があっては都合が悪い。「動物は何も感じていない」とみなしていたデカルトは、自分で犬や子牛やウサギなどを生きたまま解剖し、解剖される動物が痛がったり苦しがったりしても一向に意に介さなかったという。それに「動物は何も感じていない」とすれば、動物を殺して食べても罪悪感をもたずに済む。当時の西欧の上層階層は肉食中心だったから、デカルトの主張は歓迎されたらしい。

写真提供・福井県御誕生寺

では日本の伝統仏教はどうか。使役動物の供養は「牛馬六畜（馬牛羊犬豚鶏）供養」として、鎌倉時代にはすでに実施されていた。仏教の通説では成仏できるのは人間だけのはずだが、日蓮（一二二二～一二八二）は法華経信仰をきわめれば、人間のみならず、国土も成仏し、この国土に生まれ育った牛馬六畜もまた成仏できると断言している。

ほぼ同じ時代に、供養の対象を使役動物以外

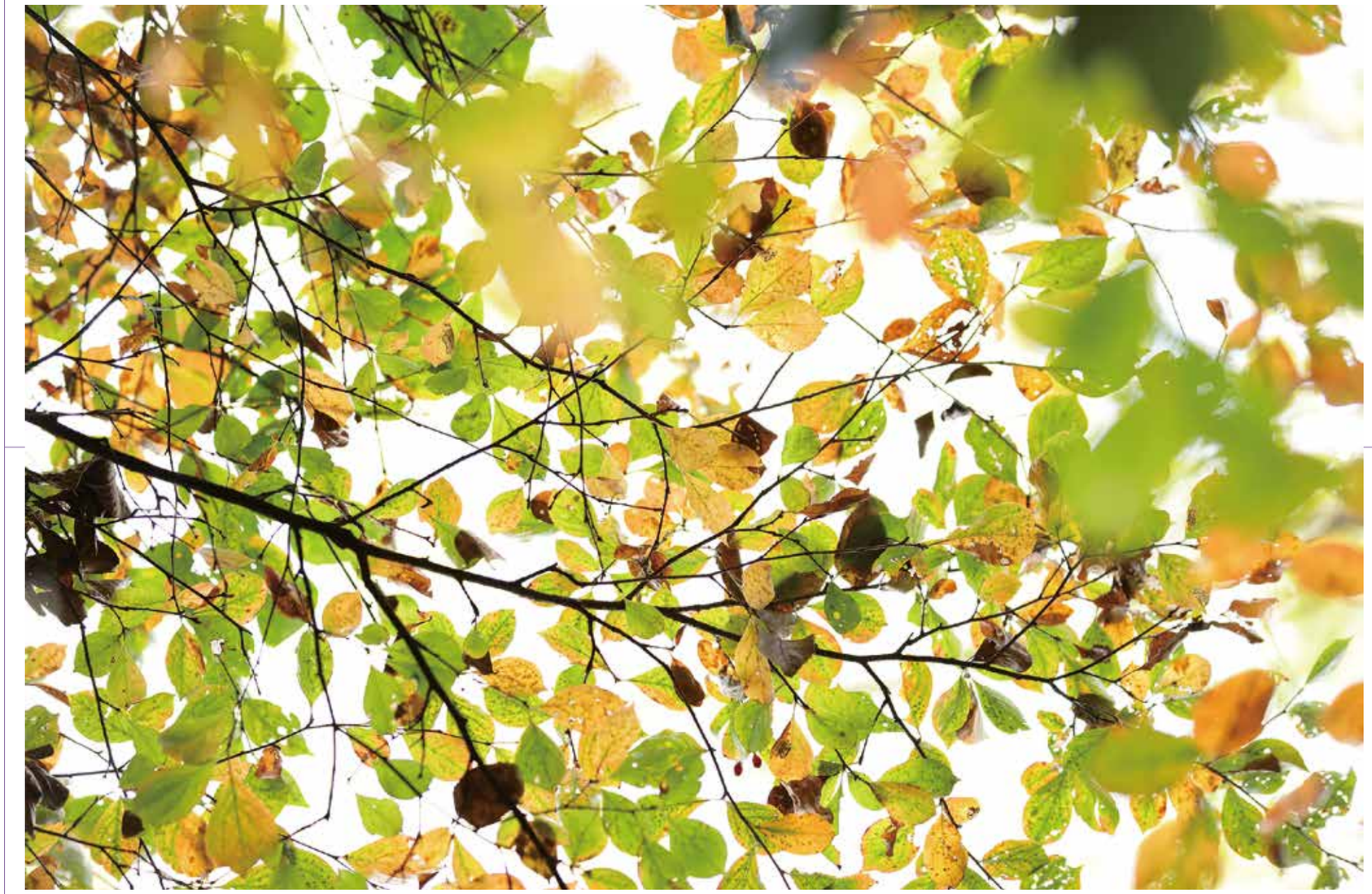
にまで広げた人物がいる。曹洞宗の第四祖瑩山紹瑾（一二六八～一三二五）である。その瑩山紹瑾が『瑩山和尚清規（禅堂の行動規範）』に「今月の晦日、歳末の除夜を迎えて、ゆかりある生きとし生けるものの今は亡き霊魂を救おうと思う。……現世の五百人の聖者は前世では五百匹のコウモリだった。前世の一万匹の魚は、現世では一万人の羅漢になっている。……今、あなたが使役している人も牛や馬も、また寺の田畑に住まう水陸の生命も、ともに生々流転するお仲間にちがいない。……憐れみ、慈しみ、成仏して聖者となるように、祈ってあげよう。心の底から、これらの生命体が智慧を増大させて、輪廻転生する回数を減らせるように、願ってあげよう」と述べている。

この教えはペット供養にそのまま通じる。現代の日本ではペットはもはや単なる飼育動物ではない。むしろ「家族の一員」という性格が濃い。人間と同じように供養しても良いと考えている方が多いようだ。ただしすこぶる現実的な課題が二つある。

①ペットの遺骨を、人間の遺骨と一緒に埋葬して良いか否か。

②ペット供養をおこなった場合、現状では宗教的な行為とはみなされないため、課税などの問題が新たに生じ、トラブルの原因になりかねない。

①はあくまで個人的な見解だが、瑩山禅師の教えに照らして一緒に埋葬しても良いのではないか。最終的には宗派として検討すべきであろう。②はペット供養を人間の供養と同じように、宗教的な行為と法律に明記されない限り、解決しない。とすれば、日本の仏教界全体、いや宗教界全体が声を上げて、ペット供養を宗教的な行為と認定させる運動を起こすべきではないか。そういう時期が来ていると思うのは、私だけではないはずだ。



写真｜金子 悟（かねこ さとる）
1974年、横浜生まれ。早稲田大学芸術学校空間映像科卒。High Five Photos合同会社代表。

170号　目次

悲しみの泉　島薗進　2

特集　上條陽子さんインタビュー
パレスチナを訪ねて25年。　やなぎさわまどか　4
現代美術家・上條陽子が続ける支援のかたち

毎日書道　松山妍流　12

募集俳句選　尾崎竹詩　13

安らかな未来に向かう「八正道」的くらしかた⑨　藤井隆英　14

暮らしに花を～九十五歳の生け花師範・喜瀬和代さん～　矢田海里　16

ペット供養を考える　正木晃　20

内山節著作集（全15巻セット）

第1巻　労働過程論ノート
第2巻　山里の釣りから
第3巻　戦後日本の労働過程
第4巻　哲学の冒険
第5巻　自然と労働
第6巻　自然と人間の哲学
第7巻　続・哲学の冒険
第8巻　戦後思想の旅から
第9巻　時間についての十二章
第10巻　森にかよう道
第11巻　子どもたちの時間
第12巻　貨幣の思想史
第13巻　里の在処（ありか）
第14巻　戦争という仕事
第15巻　増補 共同体の基礎理論

内山節（うちやま・たかし）
哲学者。元立教大学21世紀社会デザイン研究科教授。1970年代から東京都と群馬県上野村の二拠点生活を始める。

出版社：農山漁村文化協会
発売年：2016年
四六版上製
各巻平均300頁
定価：2,970～3,190円（税込）
15巻揃価46,200円（税込）

書店にてお求めください

表紙画「森の茶会」／平川恒太
僕が普段、展覧会などに発表する作品のシリーズに森の茶会というものがあります。このシリーズは千利休が完成させたお茶の精神を主題としており、お茶席では身分に関わらず武士も僧侶も共にお茶を分かち合うように、捕食関係にある動物達が同じ水辺に集まり水を飲むという平和な情景を描いたものです。お茶の文化も禅の心を今に繋げています。
今回の表紙絵では、達磨と仏教説話の「ジャータカ」の物語「月のうさぎ」に登場する動物達を同じ水辺に描きました。仲良く水を飲んだりしています。

季刊「曹洞禅グラフ」二〇二四年秋号（通巻一七〇号）令和六年九月一日発行　―　発行人＝藤木隆宣　―　編集＝加藤順子
発行所＝㈲仏教企画　〒二五二－〇一一六　相模原市緑区城山四－二－五　電話〇四二－七〇三－八六四一
http://www.bukkyo-kikaku.com　―　デザイン＝Maipu Design　―　印刷所＝恒信印刷　―　定価二〇〇円